

Title	想像力 : Sur la recherche sartrienne		
Author(s)	菅野, 盾樹		
Citation	年報人間科学. 1981, 2, p. 162-179		
Version Type	VoR		
URL	https://doi.org/10.18910/6294		
rights			
Note			

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

### 想 像

力

Sur la recherche sartrienne

菅

野

盾

樹

その著作は トルは、自らの企図する積極的著作のプランをこう披瀝している。 想像力についての古典学説の批判検討を終えるにあたって、サル

1

方法の問題

の経験に問い糾さねばならない(1)。 イマージュにかんして、経験がわれわれに何を教示するのか、そ から蓋然的なことへ移行し、現代の人間意識に示されるがままの 状態がイマージュであるためにどうしても体現しなければならな の凝視と記述とを目指すべきである。しかる後、すなわち、心的 換言すれば、心理学的構造が反省的直観に現われるがままの本質 てみせる試みとして示されるべきだ。イマージュの形相学の構築: い条件の総体を規定し終ったとき、そのときにのみ、確実なこと 現象学的心理学を、一つの特定の問題点をめぐって、実地に作っ

からথ。心理学の自由にしうるデータも、それが内観によろうが、行

という問はおかどちがいだろう。だって、そうなっているのだ

トンの法則に従って引きあう ― それは事実である。 め歩くだけだから。事実の本性はその偶然性にある。 心理学はただ人間にかんする、細別された〈事実〉を蟻のように蒐 ない。しかし彼に言わせれば、それも理の当然なのだ。というのも う声高に、自らの遵守した方法について述べている。人間の心理学 的理論素描』(一九三九年刊)と題されているが、序論で彼はいっそ れる、 現象学との出合いに歓喜したと伝えられる若きサルトルに特徴的な が遂に人間を摑みえないていたらくに、サルトルはいらだちを隠さ いたサルトルは、数年の後、今度は情動をテーマに現象学的研究の ものだ。それは、『論理学的諸研究』や『イデーン第一巻』に代表さ 心的現象の本質学からその経験学へ ― こうした標語は、フッサールッシュゥ ー 書を書き下すことになる。比較的簡略なその本は、『情動の現象学 彼の哲学的処女作『想像力』(一九三六年刊)でこのように語って 初期現象学の忠実な信奉者としての言葉にほかならない。 何故そうなの 物体がニュー

と異らない。偶然的事実をいくらうず高く集積したところで、 動の観察によろうが、みなこの類いであることでは、自然科学の例 料を入手し、その後で理論構成を企てる、と言ったところで、何を ない。心理学者は、たとえば情動を研究するという。それはよい。 をつけ加えることによっては、1に行きつけない」③のと同じこと て人間の〈本質〉に行きつけぬことは、「0.09の右側に際限なく数字 質なしには事実は何一つ物語りはしないのだ。 どのように集めたらよいか途方に暮れるだけだろう。要するに、 かの線を引くこともできないし、従ってまた、できるだけ多くの材 ることが順序だろう。そうでなければ、 しかし情動の本質、あるいはその「可能性の制約」(むがまず解明され つくためにも、あらかじめ、心的現象の形相学が確保されねばなら だ。逆なのだ、とサルトルは言う。経験科学としての心理学が緒に 何が情動で何がそうでない 決し 本

呼んだ―が存立しうる、と彼は主張するのである。またサルトルは、といことを認める。 それは解明され、矯正されねばならぬ。 にもかかいことを認める。 それは解明され、矯正されねばならぬ。 にもかかいことを認める。 それは解明され、矯正されねばならぬ。 にもかかいことを認める。 それは解明され、矯正されねばならぬ。 にもかかいことを認める。 それは解明され、矯正されねばならぬ。 にもかかいことを認める。 それは解明され、矯正されねばならぬ。 にもかかいことを認める。 イマージュにかんする何がしかの直観をあらかじやんだ― が存立しうる、と彼は主張するのである。 またサルトルの想象にいことを認める。 イマージュの経験学に示教を仰がずに、 その本質がやすやすと手に入りらず、理念としては、人間の本質の学― 彼はそれを〈人間学〉とからず、理念としては、人間の本質の学― 彼はそれを〈人間学〉とかんだ― が存立しうる、と彼は主張するのである。 またサルトルは、サルトルの想像力理論を待伏せる陥穽は、すでにここにある。 イサルトルの想像力理論を待伏せる陥穽は、すでにここにある。 イ

可能である、と彼は言い切っている合。、いいかのでいいいいいいではいいいではいいいずれにしても、そのような本質の学は完全に現象学は、未だやっと誕生したばかりで、成熟にはほど遠いのが実こうも言い訳している。心的現象の本質の解明という任務をおびた

により一定の補正を施されることを認めようとしない、知の硬直で想像の本質学とその経験学との行きちがいであり、本質が必ず事実示と目される『想像的なもの』(一九四〇年刊)にみてとれるのは、不賞にすりかえてしまうという危険について、自覚に欠けているのサルトルは、自己の手法が、本質を事実にあてがいぶちの窮屈な

方途にすぎない」という、文字通りに解せば不条理にも響く、メル方途にすぎない」という、文字通りに解せば不条理にも響く、メルカせた。現象学的還元を通じて立ち現われる超越論的主観性が、現象野に独り住むどころか、かえってそこで、間主観性の意義を帯びることになる、というのもそうした逆説の一つだ(®)。メルロ=ポンティに言わせれば、現象学の方法たる〈記述〉descriptionとは、独り特権を持つ現象学者の、しかじかに直観するところの〈表記〉notation(®) などではない。ハイデガー、サルトルなど、現象学を母胎に自らの思索をはぐくんだ同時代人に比べると、メルロ=ポンティに自らの思索をはぐくんだ同時代人に比べると、メルロ=ポンティは科学に対してよほど肯定的でありつづけた(10)。たとえば彼は言っは科学に対してよほど肯定的でありつづけた(10)。たとえば彼は言っは科学に対してよほど肯定的でありつづけた(10)。たとえば彼は言っは科学に対してよほど肯定的でありつづけた(10)。

問題は機微に触れている。われわれはここで、「本質は事実に到る

ある。

余地はない。彼は自らの立場を、〈現象学的実証主義〉とさえ呼んで 象学だなどと言ったことはない。それどころか、メルロ= ポンティ と評するのでは不足である。彼は一度も、科学は科学、現象学は現 事業である。彼がいわゆる実証科学にその固有な価値を認めていた、 記述とは、実に、〈長きにわたる帰納的探究〉の成果と称してもかま れへ助力するのが、科学的な推論であり、その理論構成なのだ(12)。 いるではないか(16) しながら収斂する両者の〈平行論〉(15)を繰り返し説いている。疑いの は科学と現象学の〈相互的包含〉(ユ゚)あるいは、目指される真理の体験 わない(13)。一言で述べれば、それは、科学との共働であり、時代の が記述の役割であり、こうした記述の形成を監視し、と同時に、そ むしろ、不備な直観から出発して、それを組み変え補訂してゆくの ている、 〈因果性による説明的理論〉を単純に排除するものではない、と(1)。 それぞれが決して混同されることなく、しかも相互に深く呼応 現象学の記述は、科学のこととする〈還元的説明〉 および

この点に関して、サルトルが通俗講演で述べて有名にしたあの文

性と必然性は何に由来するのか。時に、成り立たねばならないのだろうか。現象学的実証主義の可能らころで何故、このような途方もない立場が成り立ち得る、と同

ついてである。事実の関係についてであり、第二は、現象学の言う〈本質直観〉にここではさしあたり二つのことを指摘しておこう。第一は本質と

な二分法を認めない。初期フッサール=サルトルのように、超越論先ず、メルロ= ポンティは理性の真理/事実の真理という絶対的

めていたのは、これである。 (意味)の領域を扱う形相学と、雑多な的意識によって開示される〈意味〉の領域を扱う形相学と、雑多な的意識によって開示される〈意味〉の領域を扱う形相学と、雑多な的意識によって開示される〈意味〉の領域を扱う形相学と、雑多な的意識によって開示される〈意味〉の領域を扱う形相学と、雑多な

でっとこうしたことを意味している。 「実存は本質に先立つ。」<sup>(17)</sup>それはいかにも割り 切った考えの表白だ。彼によると、人間は、一定の形相にかたどっ には、神や自然によりあらかじめ与えられた本質なり本性といった ものはそなわっていないのだ。人間は一人ひとり、世界に現に、理 ものはそなわっていないのだ。人間は一人ひとり、世界に現に、理 ものはそなわっていないのだ。人間は、一定の形相にかたどっ れの行為を通じて何ものかに成るのである─あの周知の文句は だっとこうしたことを意味している。

い。そのような見方は、実地に製作を試み、質料と取り組んだことあてがうことによりめでたく得られる、といったものでは決してないーナイフを製作する者はいないだろう。しかし製品すなわち完成パーナイフを製作する者はいないだろう。しかし製品すなわち完成には一定の用途があり、その物が何の役に立つかを知らずにペーパーナイフを製作品〉un objet fabriqué(18)についてのサルトルの見方問題は〈製作品〉un objet fabriqué(18)についてのサルトルの見方

じて、 ものに効果を及ぼさずにいないのだ。形相によって一方的に製品 のない者のきれいごとにすぎないだろう。質料の抵抗率が形相その 得ないのであって、その変更は決して恣意によるものではない(20)。 である。いや、作者は質料の論理に説得されつつ、そう変えざるを 無だ、ということである。それは、ホテルが現実に建てられる過程 のまさに事実性においてその意味を定めるのは、 要するにサルトルには〈現実化の論理〉が見えていないのだ。製作 ないのと同じなのである。 でない。製作品においてさえも、 品では本質が実存に先立つが、人間ではその逆だ、というのは精確 あたかもそれは、 〈意味〉が授けられるのではなくて、質料もまた秘かな伝達路を通 印象深い一例をあげよう。 その設計図は何枚も残っているが、実際の建物と合う図など皆 作者が立ちあいながらこう刻め、ああ刻め、と変えてゆくため この意味を制御するのである。いや、もっと積極的に、 製作品の本質はそれだけではいわば半身不随なのであって、 建築図面がどんなに精緻でもつねに略図の域を出 ある建築史家によれば、 本質は実存に先立たない。 質料なのである。 旧帝国ホテル 換言す 製品

してわれわれは、ようやくメルロ=ポンティの逆説「本質は事実に無しにされる傾きにあることも、また明らかなところなのだ。こうの貴重な試みは、ややもすれば即自と対自の生硬な二元論により台としたのが、当のサルトルであったことは確かである(ユユ)。しかしそ現象学中に〈事物の抵抗率〉coefficient d'adversitéを繰り入れようわれわれはサルトルを殊更に厳しく難じたのだろうか。なるほど、

本質が事実によりはぐくまれるという、意識の経験学へのさしむけができる。この逆説は言明の猶予という非哲学ではなくて、むしろ到る方途にすぎない」の言わんとするところを、ほぼ理解すること

でなければならない。

破れてしまうのだが、私は一向それに気づかないでいるからである。 重い。というのも、私の想像力の翼は、 るに生身の人間としての私には、その保障の責任は負うには余りに は何によって保障されるのだろうか。経験的自我としての私、 という事情を想いおこすべきである。では一体この想像力の〈自由〉 に加えられる想像力の〈自由変更〉freie Variation により得られる) eogiqueにほかならない(22)。 えてしまうような、哲学者の必当然的明証 evidence apodictique と うことで理解しなければならないのは、公共的言語を一挙にとびこ 自由変更はむしろ間主観性の地帯で行われるべきだ。本質直観とい ポンティの言い方に従えば いう名の独断ではなくて、 さて第二として、われわれは、現象学の言う〈本質直観〉 むしろ討議的理性の賜であり、 〈人類学的経験〉expérience anthropo はばたいたと思うとすぐに メルロ=

い。それらの著作が、一つの基調として、後の『存在と無』で披瀝いるのがあきらかに見える。しかし同時に、誰の耳も欺かれはしなみよう、それらには、意義深い思索の断片が夥しく散りばめられて、ここでわれわれはこう言っておかねばならない。彼の思索の展開裡に若きサルトルが想像的なものの解明にあたって選んだ方法をめぐっせルトルが想像的なものの解明にあたって選んだ方法をめぐっ

聴きとれるだろう。はじめに引いたサルトルの言葉ではないが、彼 努力を蒸溜してしまわずをえない、重大な予断をかなでているのが 含蓄をおびているように見えるのだ、と。 いことがあり、彼にとって蓋然的なものが、かえって看過しえない にとって〈確実なこと〉が、時として〈蓋然的なもの〉にも及ばな された、あの純粋な対自と純粋な即自の形而上学へ、一切の貴重な

① J.-P. Sartre, *L'Imagination* , 1reéd. 1936, 6eéd. 1965, p. 143

⊙J.-P. Sartre, Esquisse d'une théorie phénoménologique des émotions, 1<sup>re</sup> éd. 1939, 1963. p. 16

③Ibid., p. 10.

⑤*Ibid.*, p. 17. *⊞lbid.*, p. 11.

@Ibid., p. 18.

SM. Merleau-Ponty, Phenomenologie de la perception, 1945, p. IX

8メルロ―ポンティは「超越論的主観性は間主観的である」との命題を、 ここに、フッサール現象学のメルロ=ポンティ流の改変が明瞭だ、として に、超越論的主観性の間主観性に対する優位という点にあるのであって、 箇所 (Husserliana, VI, S. 187 seq.) においても、その真意は文脈上明らか ルのテキストにそうした言明はみあたらず、類似の表現の見い出される ception, p. XIII, p. 415; Les Sciences de l'homme et la phénoménologie フッサールのものとして再三引用している(Phénoménologie de la per 1951, p. 10 ; Sens et non-sens , 1958, p. 237 ; Signes , 1960, p. 134, p. 137, p しかしシュピーゲルベルク (Spiegelberg, H.) によれば、フッサー

> ⑩Kwant, R. C. が評したように (From Phenomenology to Metaphysics, 1966 © Cf. M. Merleau-Ponty, La Structure du comportement, 1949, p. 180n p. 101 seq.)、メルロ=ポンティが基本的に反科学的見解を抱いた、という 考慮に入れるとしても、そうした見解は、彼の本来の思考の許すところで のは事実に相違している。たとえ晩年の、ちょっと見ると反科学的言辞を

∃La Structure du comportement, p. 191

cf. Phénoménologie de la perception, p. 134

SLa Structure du comportement, p. 64, p. 170

⊕ Ibid., p. 138.

Signes, p. 128

🖺 Les Sciences de l'homme et la phénoménologie, p. 32; Preface à l'our rage de A. Hesnard : L'OEuvre de Freud et son importance dans le

§Phénoménologie de la perception, p. XII; Les Sciences de l'homne…, p 9; Preface à l'ouvrage de A. Hesnard, p. 8

monde moderne, 1960, p. 5 seq

SJ. P. Sartre, L'Existentialisme est un humanisme, 1946, p. 17

*⊞Ibid* 

3 Ibid

∞座談会における飯田喜四郎の発言。『図書』三七号、一九八○年三月、 波書店、 六―八ページを参照 岩

SJ.-P. Sartre, L'Etre et le néant, 1943, p. 389

この用語は元来バシュラール(G. Bachelard)に由来する。

SLes Sciences de l'homme..., p. 36, p. 51

cf. M. Merleau-Ponty, Le Visible et l'invisible, p. 156

3 to (The Phenomenological Mouvement, vol. 2, 1965, p. 577.)°

# 2 人間の可能性としての想像

こ受すられうる諸性格とは何だろうか(ユ)。 意識が想像することができる意識であるという事実から、意識

自らを世界ではないと自覚する意識の無化による。言い換えれば、界を世界として、他ならぬ世界そのものに持ち来たらしむるのは、れば、人が意識というあり方で存在することと、人が想像しうることとは、厳密に同じ事柄である。それはよさに今なのだ。彼によに授けられうる諸性格とは何だろうかい。

を構成するこの否定性は、意識の否定性に淵源するのでなければない、哲学者の私〉が、「生涯に一度」きっぱりと、世界を世界としていく哲学者の私〉が、「生涯に一度」きっぱりと、世界を世界としている。考えてもみればよい。想像的なものはつねに、あるいは実世界の存在措定であり、世界の否定が世界の肯定であるという逆世界の存在措定であり、世界の否定が世界の肯定であるという逆世界の存在措定であり、世界の否定が世界の肯定であるという逆世界の存在措定であり、世界の否定が世界の自定であるという逆世界の存在措定であり、世界の否定性、その無化の作用に横たわっている。考えてもみればよい。想像的なものはつねに、あるいは実在しないもの(たとえばキマイラ)、あるいは不在のもの(たとえばればいる。考えてもみればよい。想像的なものはつねに、あるいは実にほどか素朴実在論者流に、事物と人々の住む世界の存在を、疑いの前に事物を見、手許に道具を使う私、他人と語り共に働く私が、目の前に事物を見、手許に道具を使う私、他人と語り共に働く私が、

ばならない。一般的に言えば、 サルトルは続けてこう言っている。実際、想像は知覚という現実 サルトルは続けてこう言っている。実際、想像は知覚という現実

らない。

とびこえること、一語にして言えば、それを否定することにほかを構成すること、したがって実在するものに距離をとり、それをイマージュを措定することは、実在の全体の埓外に一つの対象

を狙われるのだ。 る対象が、想像では、空虚裡に――非実在として与えられ、その血肉では空虚の裡に狙われ(=無化)、血肉を具えたものとして与えられあるが、しかしこの構造は知覚の場合とさかさになっている。知覚想像とは知覚の逆である。想像とは、それもまた地-図構造の構成で

は次のように述べている。とがしょっちゅうだ。知覚と想像のこの相補性について、サルトル思われる。われわれは、実際、視はじめた途端に想像してしまうこまとっている、という卑近な事実をよく説明する利点を持つようにま こうした見解は、知覚にはつねに想像がいわば生霊のようにつき

性を已れの中にたずさえた世界でなければならない…(き)というのも、というの無化はつねに、特定の観点からなされるからである。こうで、もしも意識が自由であるなら、その自由のノエマ的相関者のこの無化はつねに、特定の観点からなされるからである。こうま実在的対象の産出により仕上げられる傾きにある。というのも、実在を世界としてどう把握するにせよ、この把握はそれだけで実在を世界としてどう把握するにせよ、この把握はそれだけで

果して彼は問を正しく解いただろうか。残された問題は必ずしも

されるだろう。 されるだろう。

(3) -P. Sartre, L'Imaginaire, 1940, p. 227.(3) Ibid., p. 234.

(5)もちろんこの整理は単純化されている。(4)*lbid*., p. 235.

⊕Ibid., p. 233.

## 想像の固有性を求めて

3

imaginerである。それぞれの特徴を簡略に表示することにする。念知〉もしくは〈純粋知〉concevoir ou savoir pur、最後に〈想像〉りあげよう。それによれば、対象が意識に与えられる様式によって、吟味の糸口として、サルトルによる意識の「静態学的」分類をと

意識の静態学的分類		I 知 覚	[] 概念知	想像
1	無限の射映 を通じて= 汲み尽せな 対象の与えられ方 い性質	+	-	
	学習される = 観察される	+	<del></del>	(+)
2	対象の存在措定 実在するもの	+	— 本質として	ー 非実在として
3	作用の様態 自発性/受動性	-/+	+/	+/

らないその特性も包含されているのである。 わるものである。 わけではない。 え私に三角形の概念が知られているからといって、私に三角形のあ 含まれた内容だけしか取り出すわけにはゆかない。もちろん、 は概念知に似ている。三角形の概念からは、あらかじめこの概念に に所与の限界の範囲を決して超えることがないのだ。この点で想像 ジュがどれほど生彩に富んでいようとも、イマージュの命脈はつね 実物の場合のような射映の無限性はまるでない。たとえこのイマー れに対して、脳裡にイマージュとして思い浮べられたリンゴには、 そのどこという限界は、 だしてもかまわない。私がリンゴをどこまで詳しく見るかという、 めて気づかされるかもしれない。 ある。目を凝らせば、今まで認められなかった色相や陰影にあらた 越えてさらに詳しくこのリンゴを眺めることが、つねに可能なので な素姓のものであり、 見してそのリンゴの色艶を見てとる。しかし私には一定の限度を この表からすぐ気づかされるのは、想像が知覚とほとんど対蹠的 知覚物として一箇のリンゴを観察してみるとする。 しかしこの事態はあくまでも私の心理の事実にかか たとえば第一余弦公式 —— が事実上知られている 権利上の問題としては、三角形の概念に、 むしろ概念知に類似するという事実である。 原理上は、決して引かれていないのだ。こ 必要なら私はここで拡大鏡を取り 私の知 たと 私は

の区別の曖昧さを指摘する論者がいる。たとえば、一閃の稲光。こいうサルトルの説には反例がある、と言って、この点で知覚と想像

雑種の様相

その切実かつ如実でありながら、

欺瞞的な可視性

知覚されるものが、

知覚する者に観察という態度をつねに許すと

の技法を使えばよい)から、この反論は成り立たない。に引き伸して存分に観察できる筈である(たとえば、超高速度撮影るい。しかしながら、原理的には、束の間の電光をいくらでも時間的こには無限の射映も、汲み尽し難い性質の豊饒もないようにみえ

という態度しかありえない。そこでサルトルは想像物に認められ ている。イマージュに対しては、 なおさず、私がパンテオン=イマージュを見てはいないことを証し にせよ、その柱を数えるのは到底不可能なのである。これはとりも 一挙に始めから十本と決っているか、そうでなければ新規まき直 と指折り数えることは決してできないのだ。イマージュの ることができる。ところがパンテオンのイマージュの柱は一本二本 が本物の観察でないことは明らかだ。現実のパンテオンの柱は数え パンテオンのイマージュのここかしこを心の眼で追う。 には破風に、つぎに……と、私はまるで観察でもするかのように、 私の心の眼はその柱身に向けられる。つぎにその基壇に、そのつぎ observation とよぶ(2)――をとりうることを表わしている。サルトル べている。なるほど私はそのイマージュをまざまざと視る。 はアランの本から例を借りて、パンテオンのイマージュについて述 れわれが、 る。この欄で記号が括孤に入っているのは、イマージュに対してわ 問題はそこよりむしろⅢ1の欄に表示されたサルトルの見解にあ しかしそうした限りで一挙に始めから十四本であるか、 観察めいた態度 ―― サルトルはこれを〈準観察〉quasi 観察ではなくて、 単に観察の信 しかしこれ 柱の数は いずれ

ずしも同一指定を要さない点で知覚に似ている。何かわからないものイマージュ)である。いずれにせよ、この種のイマージュは、必 いる。 認を伴わずに想起される表象(例、誰とはわからないが見知った顔 象であり(例、誰と知られる知人の顔のイマージュ)、もう一つは再 二つに分けることができよう。一つは想起されしかも再認される表 体軀は鹿に似て、尾は牛に、蹄は馬に似、背なかの毛が五彩の色を みによって賦活され創造的性格を持つイマージュである。たとえば、 つもので、記憶表象はこれに数えられる。二つは、 実はそれに二別があることである。一つは単に再生的性格のみを持 ある。ここで思いおこされるのは、イマージュと一口に言っても、 よう強いられる羽目にならないだろうか。表中でI(想像)の各欄 である。サルトルのイマージュの形相学からすれば、出を一と読む とは何かを知らずに、そのイマージュを浮べることはできない。い のを視ることは可能なのである。これに反して、 放つ角のある獣、 かを知らぬ五歳の幼児がそうした表象を抱くことが、充分考えられ た想像上の動物のイマージュは事実存在する、たとえば麒麟とは何 この「準観察」の語をどのように捉え返すか、これが一切の岐路 そんなことはない、単に再生的性格を持ち、しかも麒麟といっ と反論されるかもしれない。 を考慮して、記号を括孤に入れる措置をとったのである。 このことは、田のいかがわしさを疑わしめる目立った事実で 問題の☆を除き、他はすべてⅡ(概念知)の各欄と符合して つまり麒麟の視覚像はこれに入る。前者をさらに しかしそうした場合、幼児が思い 後者の場合、麒麟 論理的可能性の

> とえば)絵のイマージュにすぎないだろう。 とし並みに、「思考される」にすぎないのではないだろうか なくて、「視えるように思われる」のであり、とどのつまり概念とひ 浮べるのは、麒麟のイマージュではなくて、かつて見た、麒麟の(た このことは創造的性格を持つイマージュの切実な可視性なるもの それではひるがえって、前者の部類のイマージュについてはどう 疑わせる事実である。この種のイマージュは「視える」のでは

を、

るように思う」のであり、 ないのではなかろうか。視覚という概念は単に私的な経験を言うの リンゴが「見え」るということにもならないのだ。しかし全体、こ 屋の照明を一斉にともしてみよ。だからといって、 物理的時空とそれとが何ら有効な関係をむすんでいないこと、など は、リンゴコイマージュによっては人は空腹を満たしえないこと う。そのリンゴは、サルトルの言うように、〈非実在〉である。それ だろうか。そのものの再認を伴うリンゴの表象を例に吟味してみよ ならないのではないだろうか(3)。 ない。とすると、リンゴ=イマージュを「視る」というのも、実は「見 ている。たとえば、 ではなくて、感官や時空や事物にかんするさまざまな条件と結合し のような非実在について、「見る」という言葉使いをするのは正しく してみよ。それでもなおそのリンゴは「見え」ている。反対に、 の謂である。その証拠に、リンゴを思い浮べつつ、部屋の照明を消 両眼を喪った人について、「彼は見る」とは言え 結局は 「リンゴを思考する」ことにほ いっそう鮮明

うのも、イマージュをものと解する〈内在の錯覚〉を非難したサル うものではない、と言うならば、それはどんなものなのか、 題が頭をもたげざるをえないだろう。もしも意味が何ほどかリアル らないと思われる。 ほどかリアルでなくてはならないから。われわれの見るところ、 的に関係するということは、考えにくいことである。 は何なのだろうか。あらゆる意味で存在しないものと意識とが指向 知 有性を持つかについては、充分説いていないのである。 指摘しているとは言え、それでは想像が概念知とも異るいかなる問 たくもなる。結局サルトルは、想像が知覚とは異なることを正しく トルが、同じ錯覚に陥っていることになるからだ(\*)。 意味とはそうい なものだとすれば、サルトルの努力は水泡に帰すことになる。とい イマージュの抜き差しならぬ可視性が否定されてゆき、想像と概念 〈非実在〉とは、サルトルの場合、〈意味〉signification にほかな の区別がうまくつかなくなるのだ。一体イマージュの非実在性と しかしさらに、この意味について、存在論的問 関係の項は何 、と問い

ナロゴン〉analogonの概念も、その重要さが察せられるだけに、 としおその曖昧さが目立つように思われる。 サルトルの〈準観察〉という言い方が曖昧だとすれば、名高い〈ア ひ

隣室から小暗い別室に入ってきた私は、 してみればそれは一幅の絵にすぎなかったのだ。絵として見れば をまとい微笑んでいるシャルル八世の現身を見た、と、よく見なお か。絵はそれ自体としてみれば、雑多な色塊や線の集合にすぎない。 絵画を「見る」ことについて、サルトルはどう言っているだろう 突如、 目の前に古典的衣裳

> 皮膜である。それは無意味である。絵を見るとは、サルトルに言わ 見れば、それ自身もはや微笑んでいることもない、酸化した油性 視方を中断し強いて分析的な態度で、ただのものを見るようにして どうしても微笑んでいるとしか眺められないその口辺も、そうした 絵の鑑賞とはすぐれて〈絵の解釈〉であるほかはない。

想像的なものにより揮われる詐欺行為の汚点を、すっかり拭うわけ すなわち、この絵の人物はまるで生きているようだ、とか、本物そっ ちギリシャ語で〈類似物〉だと称されており、日常言語の言い方、 その役どころである。ところが他方で、それはアナロゴン、すなわ 使のための純粋な触媒、想像的意識の発動のための匿名のスイッチ され、ただそこに在るという役割のために喚びだされる。想像力行 実在の対象を狙う、と言い表わす。しかしアナロゴンとは機械仕掛 く う。 すなわち〈意味〉を所有することなのだ。それはいつでも〈絵説き〉 くりだとかの言い方にこめられた、揺がしがたい可視性の信憑や、 不合理そのものにほかならない一箇の機会 ―― といったところが ることがない。サルトルは同じことを、このアナロゴンを介して非 とは言え決して油質の膜の上でもなければましてその背後でもな であり、 指向的関係において〈微笑んでいるシャルル八世〉という非実在 せれば、この無意味をアナロゴンとして不在の対象を指向し、この けの神にすぎないのだ。それは一方で、あらゆる自生的意味を剝奪 サルトルの言葉使いが、日常のそれとよほど異ることに注意しよ 正確にその辺りにシャルル八世の微笑を見る、と言ってはばか われわれは平生「絵を見る」と言い、タブローのその辺りに、

にはゆかなかったのだ。

次いで、もしもアナロゴンが単に純粋な機会因にすぎないのなら、たいで、もしもアナロゴンをその呼名に相応しく、思考の構成に用済みになっている。人はもうアナロゴンについて語る必要はない、に用済みになっている。人はもうアナロゴンがあるもののアナロゴンであるためには、これに先立って力にに説明が与えられていたのでなければならないからである。そに用済みになっている。人はもうアナロゴンについて語る必要はない、しは絵そのものについて語ればそれで充分だからである。人は絵そのものについて語ればそれで充分だからである。人は絵そのものについて語ればそれで充分だからである。人は絵そのものについて語ればそれで充分だからである。人は絵そのものについて語ればそれで充分だからである。人は絵そのものについて語ればそれで充分だからである。人は絵そのものについて語ればそれで充分に相応しく、思考の構成ところで、もしもアナロゴンをその呼名に相応しく、思考の構成ところで、もしもアナロゴンをその呼名に相応しく、思考の構成ところで、もしもアナロゴンをその呼名に相応している。

して、一体何が狙われるのであろう。むしろ観賞者は、色と明暗そ象絵画の場合である。これこれの色のマッスや明暗をアナロゴンとと掛値なしに言いうる例があるのではないか。それはいわゆる非具われわれは、再度、日常用語の表現に戻ってみよう。「絵を見る」ほかはない。

のものを見る、と言えるのではなかろうか。ここには知覚から想像

のか決して了解しえないだろう。そうするには予定調和にでも頼る

体何故これこれのアナロゴンがこれこれのイマージュを喚起する

象徴図式は、被験者が「頭の中に」描く、という違いはあるけれど(s)。)る事実は覆うべくもない。(ただし、非具象絵画は画布上に描かれ、考察した〈象徴図式〉 schème symbolique (Flach による) に酷似すそうした非具象絵画が、サルトル自身、『想像的なもの』第二部でへの連続性を示唆する事態が横たわっているようにみえる。

ジュを浮べたという。「プロレタリア」という語を提示されて、被験者は次のようなイマー

性のようなもの(6)。を帯びた、密度のあるマッスのようなもの……何か潜在する力動る海、定かならぬ波濤、何か重苦しい波をまろがしている、暗調平たい暗黒の拡がりで、そして下方に、漠として打ち返してい

いざなう象徴でもない。サルトルは明言している。海」は、プロレタリアを指示する記号でもなければ、曖昧な釈義をそれ自身意味に満たされた対象である。「漠として打ち返しているサルトルは言う、この図式はアナロゴンではない、と。それは、

それは、現身のプロレタリアであるのだ。Elle est le prolétariat

en personne.(7)

するのと寸分たがわず、ここでのべているわけではない。知覚において対象がその血肉を具えて現前ここでサルトルは想像力と知覚とのないまぜという事柄以外を述

図式の役割は、現前化するもの présentificateur なのである(®)。

ろに反して、知覚は想像力と連結しているのである(10)。 の知覚がつねに夢想に浸潤されていて、想像することなしに知覚することは、ほとんど不可能だと述べた。これに対しサルトルは真向なことは、ほとんど不可能だと述べた。これに対しサルトルは真向のあることを教えているのだ。言い換えれば、サルトルは真向のあることを教えているのだ。言い換えれば、サルトルは真向のあることを教えているのだ。言い換えれば、サルトルの言うとこのあることを教えているのだ。言い換えれば、サルトルの言うとこのあることを教えているのだ。言い換えれば、サルトルの言うとこのあることを教えているのだ。言い換えれば、サルトルの言うとこのあることを教えているのだ。言い換えれば、サルトルの言うとこのあることを教えているのだ。言い換えれば、サルトルの言うとこのあることを教えているのである(10)。

を知覚するという事実を認める。たとえば、ある道具の知覚は、

単

サルトルも、ある意味で、人が現に見ているより〈以上のもの〉

こんだ、述語以前の知なのである。れば、文鎮の骨董性なり美的感覚性なりも、所与の知覚に暗に融けくそこをも嵩張りがみたしているという、述語以前の知があるとす

ていきない。これではかえって、知覚と想像の区別がわからないう資格を奪われるのだという(L)。違いはただ単に手による操作のし、サルトルによれば右とほとんど同じことなのだ。前に知覚に融し、サルトルによれば右とほとんど同じことなのだ。前に知覚に融けこんでいた指向が浮きでてそれ自身として措定され、述語以前としてがれたのである。ところで、手をつかねたまま文鎮の背面を見よって、でいまり、潜在していた指向が浮きでてきて、それ自身として措る。つまり、潜在していた指向が浮きでてきて、それ自身として措る。つまり、潜在していた指向が浮きでてきて、その背面が見える。つまり、潜在していた指向が浮きでできて、その背面が見える。つまり、潜在していた。

ている。 徴図式に言及したとき、サルトルはあたかも慌てて、こうつけ加えreflexif /<非反省的〉irréfléchiという対比にも疑念は多い。前述の象のと同様に、サルトルのもう一つの区別、すなわち〈反省以前的〉 pré-指向性に現勢的/潜在的の区別を設けることで急場をしのげない

いての意識であり、かつまた己れ自身についての非意識であるこ反省的になればよいのである。この場合、一切の思考は事物につ充分である。つまり、その反省以前的性格を失って、端的に、非それには純粋知がその資格を剝奪され、想像する知になり下ればしかしイデア化は、ただまったく非反省的次元でも起りうる。

度のゆえに、現前の次元と呼べるだろう(12)。とになろう……私たちはこの非反省的次元を、意識がとるその態

べてを帰着させることもなかった筈である。 であって、非実在にすべてを帰着させることもなかった筈である。とサルトルは考えを流が、それぞれ傾聴すべき真の哲学的表現を獲得し、 はかしながら、問題は残っている。問うべきはまさにこの区別だ。しかしながら、問題は残っている。問うべきはまさにこの区別が、 
一一 眩 暈、ナルシシズム、信憑、囚われ、憑依、薄明的水平化、 
を方し、彼が見事に記述している。問うべきはまさにこの区別 
だだろうし、彼が見事に記述している。問うべきはまさにこの区別 
だだろうし、彼が見事に記述している。問うべきはまさにこの区別 
だだろうし、彼が見事に記述している。問うべきはまさにこの区別 
だない対象が今やその肉体を伴いつつ現前する、とサルトルは考え 
さない対象が今やその肉体を伴いつつ現前する、とサルトルは考え 
さない対象が今やその肉体を伴いつつ現前する。

い嫌疑をかけるつもりはない。彼の証言の一、二を掲げよう。理由のな像を純粋知にもとづかせている節はきわめて濃厚である。理由のなすぎなくなるのは必至なのだ。当面の著作では、『存在と無』におけま上で反省に先立つもの、サルトルの言う〈反省以前的なもの〉にまけで、あの哲学者の我であるならば、〈非反省的なもの〉とは単に事あり、あの哲学者の我であるならば、〈非反省的なもの〉とは単に事あり、あの哲学者の我であるならば、〈非反省的なもの〉とは単に事

実際、概念なるものとイマージュなるものとが存在するのではな概念とイマージュの関係は、それゆえ、何ら問題を提出しない。

いのである。むしろ概念にとって二つの現われ方が存在するので

ある.....(13)。

種とそれを包摂する類との関係があるだけであるなられるのであって、単に結局、イマージュと思考の間には対立はないのであって、単に

ろうか。むしろサルトルの形相学そのものを疑おう ―― 必要なら何い、と言わねばならない。彼の説の部分的修正で辻褄は合うものだれならぬのか、イマージュの〈存在理由〉は何か ―― これは永久に解れてい謎である。そればかりではない。サルトルが解明に努めた、けない謎である。そればかりではない。サルトルが解明に努めた、いいだろう。しかし覚悟は良いのか。この承認はすこぶる高価ないいだろう。しかし覚悟は良いのか。この承認はすこぶる高価ないいだろう。しかし覚悟は良いのか。

- ① H. Ishiguro, 'Imagination', Mary Warnock (ed.), Sartre, 1971, p. 117.
- O L'Imaginaire, p. 18 seq.

度でも、

- の説により説明されうるだろう。をどう処理しているか不明であるが、このケースは後述の〈アナロゴン〉をとう処理しているか不明であるが、このケースは後述の〈アナロゴン〉
- Ishiguro, *ibid.*, p. 115 seq. の指摘。

(5) (4)

© L'Imaginaire, p. 130 seq

- © Ibid., p. 137.
- ⊗ Ibia
- ある。Ishiguro, ibid., p. 118を参照。 舞台の役者をハムレットとして眺めるとき、私は何も役者を見ることの 舞台の役者をハムレットとして眺めるとき、私は何も役者を見ることの ただし前述のように、サルトルは知覚と想像の相補性は認めている。
- ⊜ L'Imaginaire, p. 157 seq
- (a) Ibid., p. 138
- ③ Ibid., p. 148
- 3 Ibid., p. 158

# \* 想像、すなわち世界創成

干の検討を試みよう。が果した記述を、その形相学の束縛から解き放つ論理を求めて、若彼の人間存在の捉え方そのものに向けられるべきである。サルトルたったのだ、とわれわれは思う。想像的なものをめぐる真の間は、サルトルの論述を批判的に辿りながら、今問題の根元に突きあ

ては、それが「鎖された想像的なものの完全な実現」ごとなるのであ系列を辿るにしたがい想像的意識の強度は増大してゆき、夢に至っマージュ ― 就寝時のイマージュ ― 幻覚 ― 夢。記号は純然たる意味で15 3 ― 線描画 ― 絵画 ― 写真 ― 物真似 ― 事物に記されるイサルトルは諸々のイマージュを、このような系列で並べあげた。

からである。

り良く示すようにみえる線描画を採りあげよう。 ついては些かふれた。ここではいっそう単純で、意識の能動性をよからしても、充分な根拠に欠けることに注意しておきたい。絵画にルトルの見地からすれば、現実に与えられるものが、想像的意識になってはひとしなみにアナロゴンにすぎない、という唯一このことないとも常識に見合った、その意味で巧みなものである。しかしサる。この系列の設定は必ずしも完備したものではないにせよ、多少る。この系列の設定は必ずしも完備したものではないにせよ、多少

限に達してしまっている ——に何かをつけ加えることは不可能だする。しかしその図を、強いて分析的な限差しで眺めかえしてみればよい。そこにはきれぎれの線の組み合せが見えるだけで、人物なはどこにも見えはしない。視覚の所与は、それを人物と見るには余めに貧弱である。そこで視覚には見切りがつけられることになろう。とどこにも見えはしない。視覚の所与は、それを人物と見るには余めの隔りは埋め尽せない。というのは、非視覚的なデータは、それは命部位の運動感覚、情動などが総動員される。それでも〈人物〉へ体部位の運動感覚、情動などが総動員される。それでも〈人物〉へ体部位の運動感覚、情動などが総動員される。それでも〈人物〉へ体部位の運動感覚、情動などが総動員される。それでしてみればよい。

が線分に投射されることによって、実在的性質とは異なる特殊な性リエルの錯視〉である。サルトルによれば、線をたどる眼球の運動義的な知覚が引き合いにだされる。それはいわゆる〈ミューラー・取りかかる前に、必ずしも想像的意識の発動の例とは言い難い、両どこか考え方が悪いのだ。サルトルは戦略をたて直す。線描画に

図形を前にして意識は己れの自発 である(2)。これは飽くまでも知覚 はABより長く見えるという次第 に転身し、ABを追う運動の方は れることはない、そのようにして は角に衝きあたり、反対に、Aと つまり、 注意を集中しても意志を鞏固に 性を発揮しえないからだ。いくら の一例である。というのも、この 縮まる力となる。その結果、 Bでは、その運動の継続が妨げら AB を追う眼の運動が伸びる力 眼の運動はAとBとで

A B

持っても、ABはどうしても長め

サルトルは周到にも、この運動とは別に知ないし意識が存在して、 を〈潜勢的運動〉ないし〈力〉に変換するのは、この運動である。 れはもはや単なる無作用のアナロゴンではありえない。惰性の線分 両者が外面的に関係をとりむすぶわけではない、と付言する(3)。 〈眼球運動〉とは何だろうか。ポイントはここにある。そ に見えてしまう。ところでサルト

ルの言う

発性の所産という自己の出生の秘密に盲目だった。しかし今、眼球

ただちにサルトルは線描画にとりかかる。前の例では、運動は自

単なる便宜以上の根拠があるのだろうか。(それにまた、例のアナロ 後者では自発性そのものが勝鬨をあげるというような割りふりに、 そのかされ、後者ではそれは自律的に非実在の人物を狙うのである。 運動は自発性そのものとして現われる。前者では運動は他律的にそ には単なる外的な表徴として指名され、知の幻惑が欲しいときには ゴンの曖昧さ。その用語は、その都度、 しかしながら、一体、前者では運動=意識が非自発性を装おい 知の自発性が願われるとき

質を帯びて対象が知覚されるのだ。

的特性 (AB=A'B')のみが知覚の場に照らしだされる筈だからで のは、意識がもしも原理的に幻惑を免れているならば、線分の実在 ならぬ。そうでなければおよそ錯覚は成り立たないだろう。という それとして現前する何かにもちあげられるのだ。) 錯視の場合、意識はいわば本気で己れの非自発性を信じなければ

アナロゴンとしてより先に、 ある。そして線描画の場合、それは知により指向される〈意味〉 流の実在/意味という対を離れてはじめて把捉されうるというこ ればならない。ポイントはこうである。想像的なものは、サルトル 如実な可視性で以て眼を撃つのでなけ

う魂を吹き込まねばならぬ。 性に己れを格下げにする自発性 ―― これは不条理だ ―― ではなく と対称的に、アナロゴンも単なる機会因ではありえない。その元来 と。また意識とは、サルトルの呈示するような、場合により非自発 してこの類似を数えているが、たとえそうした経験論そのものを採 の語義を正しくうけとめて、 て、本来からして〈魅せられた意識〉であるということ。このこと われわれはアナロゴンに〈類似〉とい ヒュームは観念の連合の原理の一つと

反して、認めてよいと思われる。重ねて注意が必要だ。類似の原理反して、認めてよいと思われる。重ねて注意が必要だ。類似の原理反して、認めてよいと思われる。重ねて注意が必要だ。類似の原理反して、認めてよいと思われる。重ねて注意が必要だ。類似の原理反して、認めてよいと思われる。重ねて注意が必要だ。類似の原理反して、認めてよいと思われる。重ねて注意が必要だ。類似の原理反して、認めてよいと思われる。重ねて注意が必要だ。類似の原理反して、認めてよいと思われる。重ねて注意が必要だ。類似の原理反して、認めてよいと思われる。重ねて注意が必要だ。類似の原理反して、認めてよいと思われる。重ねて注意が必要だ。類似の原理

りえないとしても、そこに経験論の一斑の真理を、サルトルの意に

小さい、とも確言しえないのだ。それはまさに〈幻聴〉である。しかし実在の肩を関くためには、この本人の信憑以外に感官や時空しかし実在の音を聞くためには、この本人の信憑以外に感官や時空とする。しかしこのイマージュは、抵抗率を持つ事物と同じ資格でとする。しかしこのイマージュは、抵抗率を持つ事物と同じ資格でとする。しかしてのイマージュは、抵抗率を持つ事物と同じ資格でとする。

始される。

のに対して、幻惑され、構成をさしとめられたものとして己れを構己れを対象認知の誤りという意味での、錯覚とも別である。彼の知に反し対象認知の誤りという意味での、錯覚とも別である。彼の知に反し対象認知の誤りという意味での、錯覚とも別である。彼の知に反し対象認知の誤りという意味での、錯覚とも別である。彼の知に反し対象認知の誤りという意味での、錯覚とも別である。彼の知に反し対象認知の誤りという意味での、錯覚とも別である。彼の知に反し対象認知の誤りという意味での、錯覚とも別である。彼の知に反し対象認知の誤りという意味での、錯覚とも別である。彼の知に反し対象認知の誤りという意味での、錯覚とも別である。彼の知に反し対象認知の誤りという意味での、錯覚とも別である。彼の知に反し対象認知の誤りという意味での、錯覚とも別である。彼の知に反し対象認知の誤りという意味での、錯覚とも別である。

地点を深く掘り下げること。ここからわれわれの本論はようやく開地点を深く掘り下げること。ここからわれわれの本論はようやく開題解決の一形態」(5)である、とも言いあらわすことができる。存在論らない。これをスペルベルのように、想像とは「特別に創造的な問らない。これをスペルベルのように、想像とは「特別に創造的な問らない。これをスペルベルのように、想像とは「特別に創造的な問らない。これをスペルベルのように、想像とは「特別に創造的な問らない。これをスペルベルのように、想像とは「特別に創造的な問らない。これをスペルベルのように、想像とは「特別に創造的な問らない。これをスペルベルのように、想像とは「特別に創造的な問意解決の一形態」(5)である、とも言いあらわすことができる。存在論ないかないが、という問題、世界創成の問題にほかなる世界にいかにして住むか、という問題、世界が正しく見据えているところは別ではない。帰趨するこのはないか。われわれが住むのは、非意味が質料に媒介されつつ意味はないか。われわれが住むのは、非意味が質料に媒介されているところは別ではない。

成する意識 ―― これは背理である。

*Ibid.*, p. 50.

⊙ Ibid., p. 52.

3 D. Sperber, 'La Pensée symbolique est-elle pré-rationnelle?', M. Izard et P. Smith (éds.), *La Fonction symbolique*, 1979, p. 26.

⑤ Ibid., p. 41.